

## 「恥の文化」とイノベーション

### 1. 「恥の文化」

今や、日本の農業の生産高は GDP の 1%程度になっていますが、日本人のメンタリティーは未だに農耕民族のものであり、日本という特殊な風土に根差したものと言えましょう。

長い間、日本人は農耕を中心とする生活を送り、その生活は常に自然とともにありました。日本は急峻な山地が多く、そのため雨は多くてもすぐに海に流れてしまいます。もともと工作に適した平坦な地面が少なく、少しずつ開墾し、ため池や水路等の灌漑・用水を行い、稲作、畑作用の農地を増やしてきました。耕作を放棄して 2, 3 年もすれば生命力旺盛な草、竹、樹木が生い茂り、荒地地が変わってしまいます。その上、毎年のように台風、干ばつ、豪雨、土砂崩れなど多様な災害が起こり、時に大きな地震も発生します。苦勞して手に入れた農地に、それこそ、しがみつく様に生きてきたと言って過言ではないでしょう。

競うように少しずつ開墾した田圃や畑は点在し、否が応でも農地の管理状況は村人の目にも付きます。荒れた土地は耕作者の恥となります。田植え、稲刈り等、ご近所より遅れるのも恥です。

小規模な開墾は個人で行えますが、自然に対処するには、一人、一家族では対処しかねます。中央、地方の行政もそこまでは対処しきれないでしょうから、ムラ（集落や地域）で対応せざるを得ません。ムラというコミュニティ内の価値基準は世間並みにあります。世間をはばかり、世間体が気になります。世間を無視すれば、周りから仲間外れにされ『村八分』の扱いを受けることとなります。恥を搔くとは、世間並みのことができないことです。先の戦争で信義に添わなくても兵隊となったのは、家族やムラに恥を搔かせないためであったといわれています。

ルース・ベネディクトは日本人特有の精神構造などを鋭く分析したとされる書物『菊と刀』において、欧米が「罪の文化」であるとする一方で日本は「恥の文化」であるとしています。「日本人は性質として秩序と階層的な上下関係を重んじ、『恩と義理』を大事にする。その背景には『恥の文化』があり、その文化が積極的で自発的な行動を抑止している真の原因である」などと文化人類学的分析を行っています。

### 2. 「恥の文化」とイノベーション

「恥の文化」で日本のイノベーションを考えてみれば、上手く運んで発明で大きな成功を掴むことができれば、それに越したことは有りませんが、成功確率は低く、失敗すれば愚か者と言われるのが落ちです。それよりはコツコツと小さな「カイゼン」を積み重ね、類似品の中で高い品質評価を勝ち取り、生産性を上げた方が良い、篤農、名工としての評価を得た方が良いという考えになって当然です。

欧米人の「罪」は唯一神との契約に対する罪であり、罪にならなければ自由です。

特に新大陸の米国は制約が少なく、唯我独尊的に目的に向かって進むことができたでしょう。失敗しても罪にはならず、貴重な経験をした人という評価になるのでしょうか。今なお、日本も欧米も多分にそうした情緒を残しているようです。

しかし、21世紀に入って世の中がすっかり変わってしまったことに気付かなければなりません。経済のグローバル化と新興国の興隆、生産機械の高度化・精密化、特にICTと生産の融合により第4次産業革命ともindustry4.0とも言われるような時代になつては、「罪の文化」も「恥の文化」もあつたものではありません。世界中が新しい価値の創造と独占を巡って争う時代だと考えなくてはなりません。

市場がグローバル化してしまった時代は、「恥の文化」の発想を変えなくてはなりません。「恥」の対象はムラでなく、世界と考えなくてはなりません。「恥」を搔くのは個人や家族ではなく、日本であり日本民族です。「恥」とは世界に先駆け日本人が「新しい価値」を創造できないことであると考えなければなりません。小さなカイゼンの様なイノベーションでもよいのです。「カイゼン」提案のように、イノベーションに取り組まないことが「恥」だとする様な思考様式に変わらなくてはなりません。

### 3. 守るべき日本の文化

その他、日本人がイノベーションに取り組むうえで、大事にしなければならない日本の文化として「自然崇拝」と「和」のころについて考えてみました。

#### (1) 自然崇拝、環境重視

我が国は多分に多神教です。一木一草、岩石にすら魂があるとすする自然崇拝であり、環境は神が人類に与えたものではなく、共生しなければならず、破壊すればバチが当たるものなのです。

エネルギー、資源は「もったいない」の精神で、感謝しながら使わせていただくという謙虚な姿勢が大事でしょう。

#### (2) 「和」のころ

さらに聖徳太子以来の「和」の精神があります。聖徳太子・十七条憲法の「和を以て尊しと為す」、協調の精神です。もっと気楽に、オープンイノベーションに取り組めないものでしょうか。

但し、イノベーションの和・連携の相手は、国の内外を問わず、慎重に選択しなければなりません。特に世界には、国際法を遵守せず、「恩と義理」の概念が希薄な、あるいは欠落している国や民族も多いのですから。